

太宰治著述一覽稿(V)

— 昭和十五年 —

山 内 祥 史

女の決闘(中篇)／連載第一回・月刊文章・新年號、第六卷第一號・昭和十五年一月一日發行・60頁・66頁・「創作」欄

『女の決闘』(河出書房、昭和十五年六月十五日)に、全文収載された。

『富嶽百景(昭和名作選集28)』(新潮社、昭和十八年一月十日)に、全文収載された。

『女の決闘(太宰治代表作集)』(新潮社、昭和二十三年七月二十日)に、全文収載された。

『太宰治全集第五卷駄込み訴へ』(八雲書店、昭和二十三年十一月三十日)に、全文収載された。

〔同時代評〕 中村地平「太宰治著『女の決闘』」(新潮)第三十七年第八号、昭和十五年八月一日)には、つぎのように記されている。

新著中「女の決闘」は鷗外の譯によるヘルベルト・オイレンベルグの同名の作品に登場する人物に、作者の豊かな空想を加へ、原作よりか「現實の生ぐさい迫力を感じさせよう」とした、一種の物語り小説である。「小説の考へ方と作り方」を逆用した、をかした意図の作品であるが、原作に現實的な肉づけを加へ得て成功してゐるから妙である。

三上秀吉「太宰治著『女の決闘』『思ひ出』」(文学者)第二卷第八号、昭和十五年八月一日)には、つぎのよう

に記されている。

「女の決闘」に集められた七篇は、紅潮して、口をへの字にゆがめた太宰治が「ダマスクスはまだ遠い」と叫びつゝ、赤裸で走つてゐる勇ましい姿である。殊に「女の決闘」「駈込み訴へ」「走れメロス」は、新風を吹きなびかせるすぐれた一聯の作品であり、私はこれらを読み了つて、この作者は美しい七首を呑んでゐると、溜息をついて思つたのであつた。／（略）／しかし私自身の好みからいへば、そのやうな才氣ハツラツとした、きは立つた新風ものよりも、處女作らしい「思ひ出」や、昭和十四年作「富嶽百景」などに、すなほな好意は持てるのである。若し太宰氏が、かういふ雰圍氣ばかりに安閑とどまつてゐて、「女の決闘」その他のやうな冒險、身を挺して人間の心理のもつと深いところへ突つ込む才氣を見せなかつたら、作品の振幅は非常にせまくなるといふ心配はたしかにあり、氏の個性を十分生かしきる機会を失はれるといふ但書を添へながら、兎に角、「思ひ出」や「富嶽百景」は、ケレンも危げもなくてなかなかよい作品であると思つた。／（略）／このやうな構成の面白さは、こゝでは単にスケッチとしてのみ現れてゐるのであるが、しかしそれが心理描写の作品である「走れメロス」や「女の決闘」の中に、人生のナマな深刻な心理描写としてよりも、一種の心理の構成として表現されてゐることである。そこに太宰氏の長所ならびに短所があるやうに思ふ。なぜなら、そのやうな構成は、行きすぎれば行き過ぎるほど、作品は面白くなるけれど、真実の人生、嚴肅な人生が、稀薄になつてくる傾向があると思ふからである。たとへば「女の決闘」の最後の章などは、行きすぎになつてゐないだらうか。第六章で、主人公の細君の心理を、もう一度でいいいに説明されたために、今までもやもやしてゐた細君の神祕さが、興ざめになつたごとくに私はちよつと考へたのであるが、如何か。／ともかく、太宰氏は、一作を以て批評することはあたらないと思ふ。「富嶽百景」は、なかなか面白い作品であるが、あんなところに長居し、遊んでゐても仕方がないといふ見方もあるが、それでは「女の決闘」や「走れメロス」はどうか。「富嶽百景」でみたされなかつた人間心理の深さを、こゝでは現されてゐる

ではないかといはれる。しかしこれらの作品に立つて、再び「富嶽百景」を眺めなほすと、ケレンのないよい味ひをかみしめることができる。兎に角、そのやうな作品の上での問題は、最早こちらの註文ではなくて、太宰氏はよく知つてゐる。太宰氏のことは、一番よく知つてゐるのだから、これからの作品がものをいふであらう。だから、ダマスキスは、まだ、なかなか遠いのである。

矢山哲治「手紙（岸田國士・横光利一・太宰治について）」（『こをろ』第四号、昭和十五年九月二十八日）には、つぎのように記されている。

最近「女の決闘」といふ一篇を読んですこし迷つた。この作品の恐しい意図はたしかに、通じる、何故といつて僕にとつてもたいへんな問題だから。さうして、自分は太宰治を脱皮したやうに納得しかけてゐるが、ひよつとすると單に注目をはずさうとしてゐるばかりではないのか、とすれば僕の態度は危険なものではないか、としばらく考へたことであつた。しかし、それは一時の不安であつた。あの時期のやうに太宰治を唯一の作家のやうに考へなくなつた今日の方が、彼を作家として評價することは大きいであらう。

元本國雄「新進作家論」（『文庫』第一卷第八号、昭和十六年十月一日）には、つぎのように記されている。

「女の決闘」とか「新ハムレット」などゝいふ他にたくする作品も結局は、己の身をこれ等の者の境遇に移して傷めつけて見せるのである。だから、一見客觀をよそつてゐるやうな作品も、さうでない作品も、其の間に距離はないのである。たんげいすべからざる氏の多才も、つきつめて見ればそれは外觀の手法だけで根底をなすものは同一である事に気づく。むしろ外觀の変化の割合に根はいたつて融通のきかない作家だとも云へる。これは当然のことであらう。本音を吐ける方法は作家である以上いくつかあみ出せるであらうが、本音といふものはさういくつもない筈だからである。又さう本音の内容が急に變ることも出来ないからである。とに角、氏が若手を通じての才人らしい風貌を奉られてゐる所以は、つとに、氏の身にびつたりはまつた本音を吐く方法をしつかりと見出し、そ

れを自由にマスターし、いくたの手法をあみ出してゐる所に基因する。

宮田戊子「太宰治氏の『東京八景』其他」(『近代日本文学の分析』霞ヶ関書房、昭和十六年十一月十八日)には、つぎのように記されている。

(前略)この劣等感は大宰氏の作品にあまねく見られるものだ。『女の決闘』には、芸術家を下等なものとなし「それは何も、この男ひとりに限つて、下等と呼んでゐるのでは無くして、芸術家全般がもとより下等のものであるから、この男も何やら著述をしてゐるらしいその罰で、下等の仲間に無理矢理、参加させられてしまつたといふわけ」であると書いてをり、『駄込み訴へ』では、キリストの弟子の中のユダが商人なるがための劣等感と、他の弟子との嫉妬によるキリストへの愛憎相反を描いてゐる。／また罪障感を種々な意味で表現することも大宰氏の作品の特徴である。『女の決闘』の女房は、夫の恋人をたふしてしまひ、はりきつてゐた心がゆるむと罪障感におそはれ、自分の殺した女学生のあるところからなるだけ早く遠くへ逃げようとして、広い原を夢中で駆けまはるものであるが、追つてゐるのは超自我で、追はれるやうに感じてゐるのは彼の女の自我であることはいふまでもない。その他どの作品にも罪障感があらはれてをり、批評家はこれを大宰の懺悔ものと称してゐる。この罪障感とは、やはり作者が金持の子は地獄に陥らねばならぬと考へてゐたその変形であらう。作家たることに對する罪障感とは、おそらく家から學費をうけて、それに対して何もしなかつた延長であると考えられる。／大宰氏の作品は才筆であつて、中でも『女の決闘』などは面白く読ませる佳作であるが、しかし私見を以ていへば、眞実性が乏しい憾みがある。近頃は文學は娯樂だなど、文學者自身が云つて恬としてゐる時代だが、私はこの説に賛成することが出来ない。

小坂松彦「文芸時評——二三の新進作家とその方法——」(『赤門文學』創刊号、昭和十六年十二月一日)には、つぎのように記されている。

太宰治氏の作品を年代順に見て行つて、感ぜられることは氏の中にあるジョイス的態度とフロオベルの態度の対立的併行である。大体太宰治氏は徹底的に浪漫主義的な作家であるが凡そ、浪漫主義の一般的特徴として考へられる分裂性、多様性が、氏の初期の作品から昨今に至るまでの主要な傾向として氏を支配してゐるのであつて、氏におけるスタイルの未固定といふことも氏のかういふ浪漫主義的特徴によるものと考へてよいであらうと思はれる。この傾向が、今私のジョイス的と呼んだそれなのであつて、この傾向は作品形式として独白（告白文学）の形態をとつてゐる。即ち、氏にあつては、氏の中の自我の高貴性がその奔出形態として統一性ある物語の形態をとらないで、独白即ち告白文学の形態をとつてゐるのである。氏におけるこの傾向は「虚構の彷徨」や「ダス・ゲマイネ」の時期に最もはげしく、最近では氏の物語的態度——即ち次に述べようとするフロオベルの態度と結びついて、眩きといつた形を取つて來てゐるのが見られる。さてかかる独白的態度と対立するフロオベルの態度とは、芸術至上主義的な物語風のそれであり、之は氏にあつては古典主義的な甘美さをともなつて現はれてゐる。氏の中にある浪漫主義的作家における耽美的傾向のそれである。作品としては、「走れメロス」や「女の決闘」の時代に強くあらはれてゐる。最近では氏のこれらの二つの傾向はそれぞれの完成に向つて進んでゆくやうに思はれる。たゞ独白も比較的過去の作品のやうな烈しさが除かれて來てゐる。この独白とか、それに類するデフォルマシオン、焦点拡大とかは氏の非妥協的な浪漫精神のあらはれであつて、之は氏の最大の特異性と考へられるので、この傾向と前の物語的傾向の二つの対立の中に氏の将来性の豊富さが、その困難をともなつてはつきりと覗かれてゐるやうに見える。ここに太宰治氏の期待すべき将来があるのである。／＼茲に前述の物語風の態度と結びついてゐる審美性について更に考へてみよう。自我が現実的なものの梗塞の前に見出す孤高性は積極的に独白の形をとる一方、消極的につくり出すのが理想の破綻の後に來る哀傷なのであつて、之は氏にあつては美への追及発見と憧憬の形をとつてゐる。之は氏にあつては最近いよいよその色合を濃くしてゐるやうに見える。森鷗外などにかういふ傾向はよく

みられたが、たゞ森鷗外が耽美的なのに対して太宰氏は飽く迄描写を心掛けて、むしろ審美的といった点が、太宰氏の特異性で、之はほかの作家と可成り異つた、太宰氏の最大特色であらう。

小坂松彦「太宰治論覚書——『私』と散文精神について——」（『赤門文学』第二卷第六号、昭和十七年六月一日）に
つては、「風の便り」の項を参照のこと。

〔付記〕「第一。」を収載。初出本文末尾には「（以下次號）」とあり、目次には「女の決闘第一回」とある。六月号
まで六回連載。

俗天使・新潮・新年特大号、第三十七年第一号、通巻四百二十四号・昭和十五年一月一日発行・40頁・48頁・「創作特
輯二十三篇」欄

『皮膚と心』（竹村書房、昭和十五年四月二十日）に、全文収載された。

『^{アール}老ハイデルベルヒ』（竹村書房、昭和十七年五月二十日）に、全文収載された。

『八十八夜』（南北書園、昭和二十一年三月一日）に、全文収載された。

『八十八夜（太宰治短篇集）』（南北書園、昭和二十二年二月二十五日）に、全文収載された。

『八十八夜』（南北書園、昭和二十三年八月一日）に、全文収載された。

『太宰治全集第五卷駄込み訴へ』（八雲書店、昭和二十三年十一月三十日）に、全文収載された。

〔同時代評〕無署名「新潮」（『三田文学』第十五卷第二号、「今月の小説」欄、昭和十五年二月一日）には、つぎの
ように記されている。

太宰治の「俗天使」は少しなめすぎてる。この作者最近甘へ根性をもつてせつかくの才能を濫費してゐるさま見
るに堪えず。

上林曉「新年號創作短評」（『文学者』第二卷第二号、昭和十五年二月一日）には、つぎのように記されている。

未だ全部読むことが出来ませんが、読んだうちでは、太宰治氏の「俗天使」（新潮）、「鷗」（知性）、川端康成氏の「正月三ヶ日」（中央公論）、林芙美子氏の「玄関の手帖」（文芸）などに心を惹かれました。かう挙げてみて気をつくことは、清く澄んだ作品に心を惹かれてゐるやうです。

岩上順一「太宰治の一面」（「三田文学」第十六卷第二号、昭和十六年二月一日）については、「八十八夜」の項を参照のこと。

〔付記〕 初出誌奥付には「通巻四百二十二號」とあり、「昭和十四年十一月十日印刷／昭和十四年十二月一日発行」とある。なお、巻末の「記者便り」には、つぎのように記されている。「紙の統制もいよいよ現実化されて、本号も予定より、可成り減頁を以てしたが、尚かつ、新年號の面目をもち、かつ、圧倒的な盛観きはまらない小説陣をもつて、相見えることの出来たのはうれしいことである。新年号は、（略）創作二十三篇を以て、全誌の大半を飾つた。何れも、作者の面目を伝へて遺憾なき好箇の短篇のみである。あるひは、かういふ短篇特輯が機会となつて、しばらくかへりみられなかつた、短篇小説の再興の機運がもたらされるのではあるまいか、ともおもはれるのである。幸に、御精読の上、御批判を乞ひたいものである。」

鷗・知性・新年号、第三卷第一号・昭和十五年一月一日発行・160頁・「創作」欄

『皮膚と心』（竹村書房、昭和十五年四月二十日）に、全文収載された。

『風の便り』（利根書房、昭和十七年四月十六日）に、全文収載された。

『狂言の神』（三島文庫14）（三島書房、昭和二十二年八月三十日）に、全文収載された。

『太宰治全集第五巻駈込み訴へ』（八雲書店、昭和二十三年十一月三十日）に、全文収載された。

〔同時代評〕 上林暁「新年號創作短評」（「文学者」第二卷第二号、昭和十五年二月一日）については、「俗天使」の項を参照のこと。

島尾敏雄「断片一章」(「こおろ」第三号、昭和十五年七月二十八日)には、つぎのように記されている。

太宰治といふ人を、どこ迄、信じていゝのでせう。「とにかく誰でも一生懸命、精一ぱいで生きてゐるのが判つてゐるし、私は何も云へなくなるのだ。」(鷗)こんなこと迄云つて、こう云ふ事を言ひ出すと、本当に……分つてゐます。こう云ふことが気にかゝる人は生活する資格のない人です。いつ迄たつても、ぐるぐる栗鼠の水ぐるまのやうなもので、ほつつき歩いて、つかれて、寝るより、てがありません。しばらくの間、一切を信じないでみましよう。しばらくの間、父よ、世間よ、許して下さい。さあ、何でも現はれて下さい、何にも信じませんから。

矢山哲治「手紙(岸田國士・横光利一・太宰治について)」(「こをろ」第四号、昭和十五年九月二十八日)には、つぎのように記されている。

僕が「桃日」を書いてゐたころ、彼の「鷗」を読んで、少しばかり苦痛であつたが、しかし、「桃日」を書きあげたことが、太宰治を裏切ることの完成であつたと思ふ。この手紙の冒頭に自作のことは一寸書いたが、あの作品は太宰治に抵抗するために、さうすることであの時期を(しなければ苦痛だし、することが苦痛であつても)反省しなかつたのだ。あまり楽屋めいた科白になつて許してくれ給へ。ともあれ、人生の伴侶をもとむることも困難であらうが、まして永遠の伴侶といふものの意味を考へてみたくなる。

〔付記〕 初出誌の「鷗」には、「――ひそひそ聞える。なんだか聞える。」というエピグラフが付されている。なお、同誌の「編輯後記」には、「紙の入手難から、増頁をする代りに數篇を八ポイント組にし、創作二篇をも組置きとするの止むなきに至つた。」とある。同誌所載の「創作」は、太宰治の「鷗」一篇だけである。

美しい兄たち・婦人畫報・新年特大號、第四百三十一號・昭和十五年一月一日發行・214頁・「小説」欄

『皮膚と心』(竹村書房、昭和十五年四月二十日)に、「兄たち」と改題して、全文収載された。

『老ハイデルベルヒ』(竹村書房、昭和十七年五月二十日)に、全文収載された。

『八十八夜』（南北書園、昭和二十一年三月一日）に、全文収載された。

『八十八夜（太宰治短篇集）』（南北書園、昭和二十二年二月二十五日）に、全文収載された。

『二十世紀旗手（太宰治短篇集）』（浮城書房、昭和二十三年五月一日）に、全文収載された。

『八十八夜』（南北書園、昭和二十三年八月一日）に、全文収載された。

『太宰治全集第五巻駄込み訴へ』（八雲書店、昭和二十三年十一月三十日）に、全文収載された。

〔付記〕 初出誌所載の「美しい兄たち」の本文途中には、挿絵が二点挿入されていて、「カット・伊勢正義」とある。

「目次」には「繪・伊勢正義」。なお、「編輯後記」には、つぎのように記されている。「小説欄は伊藤整氏『十八歳』太宰治氏『美しい兄たち』の二篇で、この若く美しい生の讃歌は充分新年の贈りものと信じます。」

短片集・作品倶楽部・一月号、第二巻第一号、「創作特輯号」・昭和十五年一月一日発行・13頁・「創作」欄

『皮膚と心』（竹村書房、昭和十五年四月二十日）に、「女人訓戒」と改題して、「短片集」の総題の下に全文収載された。

『老ハイデルベルヒ』（竹村書房、昭和十七年五月二十日）に、「短篇集」の総題の下に全文収載された。

『八十八夜』（南北書園、昭和二十一年三月一日）に、「短篇集」の総題の下に全文収載された。

『八十八夜（太宰治短篇集）』（南北書園、昭和二十二年二月二十五日）に、「短篇集」の総題の下に全文収載された。

『八十八夜』（南北書園、昭和二十三年八月一日）に、「短篇集」の総題の下に全文収載された。

『太宰治全集第四巻おしやれ童子』（八雲書店、昭和二十三年九月三十日）に、「短片集」の総題の下に全文収載された。

〔同時代評〕 加藤俊太郎「読者通信」（『作品倶楽部』第二巻第三号、昭和十五年三月一日）には、つぎのように記さ

れている。

一月号は量質共に立派なものでした。読者として編輯の方々に御禮申し上げます。／太宰治氏の短篇を得たことはよろこばしいことでした。浅見淵、亀井両氏の文もよかつた。

鈴木努「読者通信」(「作品倶楽部」第二卷第三号、昭和十五年三月一日)には、つぎのように記されている。

さて、今月は創作評のバトンを私に握らせて下さい。先づ、太宰治氏の「短片集」から。私は此の人の作品が好きである。現実ばなれの美しさが、妖しいまですら／＼と書けるのだから、すちに期待してはならぬ。

斎藤行文「読者通信」(「作品倶楽部」第二卷第三号、昭和十五年三月一日)には、つぎのように記されている。
新年号の堂々たる内容に敬服しました。その読後感を一つ——。太宰治、仲町貞子、両氏共愛つた創作だと思つただけ——

〔付記〕「作品倶楽部」一月号の奥付には、「第一卷第八号」とあるが、これはあやまりと考えられる。同誌巻末の「編輯室」には、「太宰、仲町両氏の創作を得たことは喜びである。丸山氏の小説が終に締切に間に合はなかつたことは残念であつた」とある。

春の盜賊・文芸日本・一月号、第二年第一号・昭和十五年一月一日発行・170頁・「創作特輯」欄

『女の決闘』(河出書房、昭和十五年六月十五日)に、全文収載された。

『信天翁(太宰治文藻集)』(昭南書房、昭和十七年十一月十五日)に、全文収載された。

『女神』(白文社、昭和二十二年十月五日)に、全文収載された。

『誰も知らぬ』(ロッテ出版社、昭和二十三年八月十五日)に、全文収載された。

『太宰治全集第五卷駄込み訴へ』(八雲書店、昭和二十三年十一月三十日)に、全文収載された。

〔同時代評〕尾崎一雄「新年号創作短評」(「文学者」第二卷第二号、昭和十五年二月一日)には、つぎのように記さ

れている。

読んだ範圍で印象深かつたのは、／「古い話」古志太郎（早稲田文学）／「春の盜賊」太宰治（文芸日本）／「言葉」宮内寒彌（文学者）

神山潤「新年号創作短評」（「文学者」第二卷第二号、昭和十五年二月一日）には、つぎのように記されている。

『文芸日本』に載つてゐる太宰治氏の『春の盜賊』を面白く読みました。この雑誌は発行がお話にならぬほどおそく、誰も時評には書けぬと思ひますので、一寸。

中村地平「太宰治著『女の決闘』（「新潮」第三十七年第八号、昭和十五年八月一日）には、つぎのように記されている。

太宰治氏の近著「女の決闘」を通読し、初期の著作「晩年」などに収められた作品と比較してみると、作風がかなりちがつてきてゐるやうである。／初期の作品に於て、太宰氏は人生への鬱屈を語らうとして、しかもそれが分裂する意識のために自在にはゆかない。悪戦苦闘の結果、独特のスタイルをうみだした、といふやうなところがあつた。八方にのびる神経の觸手を、脆弱な観念と生理とでやうやくもちこたへてゐるやうな、微妙な、不安な面白さがあつた。／しかし、「女の決闘」一卷に収められた作品でみると、そのスタイルはすっかり身についてしまつてゐる。手に入つたスタイルを駆使して、手あたり次第身辺を小説化している感じである。初期に見られた不安のかはりに、一種のおほらかさや、フモールやが作品をおほつてゐる。／この相違が根源的にはどこから來てゐるか。氏自身の告白を、「春の盜賊」から聞いてみよう。（「女の決闘」P168）／『いまは少しづつ生活而建て直し、つましい市井人の家をつくる。それが第一だ』／謂はば生活の上に於ける浪漫的の自在と放恣とが、古典的の静謐と形式美とを憧憬してゐるのである。しかもこの場合、憧憬は結局は實現となつてゐる。幸か不幸か、氏は著者と、その憧憬を實踐し、おまけに、その實踐は成功してゐる。／初期の作風の浪漫的憂悶が、最近の古典的朗明に變つ

てきたのに不思議はないであらう。

『付記』 初出誌所載の「春の盜賊」には、「(わが獄中吟)」というエピグラフが付されていて、本文末尾に「(完)」とある。なお、「(H)」の「編輯後記」には、「創作欄も動かない充実を示した。先づ伊地知氏の上海よりの寄稿を始めとして久方ぶりの頼田島氏の好短篇、新人田岡氏の登場、太宰氏は八十枚の力作を寄せられ、大鹿氏また北方開拓の長篇を起稿せられた。伴氏の「青雲館」も今号に至つて愈々高潮した感がある。何れも御愛読願ひたい。」とある。

困惑の辯・懸賞界・一月下旬号、第六卷第二号、通卷七十一号・昭和十五年一月二十日発行・10頁12頁

『思ひ出』(人文書院、昭和十五年六月一日)に、「近事片々」の総題の下に全文収載された。

『信天翁(太宰治文藻集)』(昭南書房、昭和十七年十一月十五日)に、全文収載された。

『太宰治随想集』(若草書房、昭和二十三年三月二十一日)に、全文収載された。

『太宰治全集第十六巻もの思ふ葦(近代文庫23)』(創芸社、昭和二十七年七月一日)に、全文収載された。

『付記』 初出誌では、目次にも本文にも、「大宰治」とある。「編輯後記」には、「純文学界で注目すべき新人として知られてゐる太宰治氏の玉稿や最近目覚ましい業績を示されてゐる中村地平氏の玉稿、劇に小説に健筆を揮つて居られる岡田禎子氏の玉稿、女流歌人として餘りにも有名な柳原輝子氏の玉稿等みな味はうべき文章であると信じる。」とある。

心の王者・三田新聞・第四百二十八号・昭和十五年一月二十五日発行・5面

『思ひ出』(人文書院、昭和十五年六月一日発行)に、「近時片々」の総題の下に全文収載された。

『太宰治全集第十六巻もの思ふ葦(近代文庫23)』(創芸社、昭和二十七年七月一日)に、全文収載された。

このころ(1)・国民新聞・第一七三〇九号・昭和十五年一月三十日発行・8面・「学芸」欄

『太宰治全集第十六巻もの思ふ葦（近代文庫23）』（創芸社、昭和二十七年七月一日）に、全文収載された。

〔付記〕 振仮名付。二月一日まで、三回連載。

このごろ（2）・国民新聞・第一七三〇号・昭和十五年一月三十一日発行・8面・「学芸」欄

翻印状況については、「このごろ（1）」を参照のこと。

〔付記〕 振仮名付。

女の決闘（中篇）／連載第二回・月刊文章・二月号、第六巻第二号・昭和十五年二月一日発行・35～40頁・「創作」欄

翻印状況については、「女の決闘（中篇）／連載第一回」の項を参照のこと。

〔同時代評〕 「女の決闘（中篇）／連載第一回」の項を参照のこと。

〔付記〕 「第二」を収載。末尾に「（以下次號）」とあり、目次には「女の決闘 中篇」とある。なお、同誌口絵に「太

宰氏とその原稿」の写真が収載されている。

駈込み訴へ・中央公論・二月政変号、第五十五年第二号、通巻第六百三十号・昭和十五年二月一日発行・創作1／創作14頁・「創作・新人特選」欄

『女の決闘』（河出書房、昭和十五年六月十五日）に、全文収載された。

『日本小説代表作全集5 昭和十五年前半期』（小山書店、昭和十五年十一月二十五日）に、全文収載された。

『駈込み訴へ』（月曜荘私版、昭和十七年一月一日）に、全文収載された。

『富嶽百景（昭和名作選集8）』（新潮社、昭和十八年一月十日）に、全文収載された。

『女の決闘（太宰治代表作集）』（新潮社、昭和二十三年七月二十日）に、全文収載された。

『詩と文学／鱗』の「太宰治追悼」（赤絵書房、昭和二十三年九月二十五日）に、全文収載された。

『太宰治全集第五巻駈込み訴へ』（八雲書店、昭和二十三年十一月三十日）に、全文収載された。

〔同時代評〕 高見順「新人論—明暗と混合—」(『新聞聯盟』昭和十五年二月)には、つぎのように記されている。

新人といふ現れ方でも実質的は旧人といふのに「絵姿」(中央公論)の石上玄一郎氏がある。芥川的なかういふ小説も、あつても悪くはないだらうが、私などが考へる現代文学の性格からは遠い。昔の話を石上氏は昔に即して書いてゐるが、大宰治氏の「駆込み訴へ」(中央公論)は昔も昔、大昔のユダの裏切りに現代心理の光りをあてて、才気煥発。だが太宰氏には矢張り現代人を相手にして貰ひたい。

無署名「中央公論」(『三田文学』第十五卷第三号、「今月の小説」欄、昭和十五年三月一日)には、つぎのように記されている。

太宰治の「駆込み訴へ」はいよいよ太宰治独自の文学に驀進する光景がありと見える。太宰はもう新人でない。新文学一方の旗頭で、このごろの流行作家たちを睥睨せしめる筆力をもつてゐる。この人に短篇ばかりたむのはジャーナリズムの悪傾で一度長篇を依頼するといひ。千枚位の長篇を書いてみると太宰にたのんだら奴さんの頭の整理がついてとびつきり上等の傑作が生れるだらう。

無署名「スポツトライト—新人紹介の意義—」(『新潮』第三十七年第三号、昭和十五年三月一日)には、つぎのように記されている。

「中央公論」に名を連ねてゐる太宰治氏、眞杉静枝氏、壺井栄氏、北原武夫氏、大田洋子氏などといふ人々は、果して新人とか、新進作家といふ名に当て嵌めて、適当な作家だらうか。これは人おのおのの見方、考へ方に依ることであらうけれど、以上の五氏などは、既に中堅作家としての動かない位置を確保してゐる人たちであるまいか。嵯峨伝「創作月評」(『新潮』第三十七年第三号、昭和十五年三月一日)には、つぎのように記されている。

すこし俗っぽい譬へかたになつたやうだが、二月号の各雑誌の創作欄を通覧してみても、感じたのは、新人の作品が大半をしめてゐるといふことだ。(略)「中央公論」になると、これははつきり新人創作特選と銘をうつて、太宰

治、長谷健、真杉静枝、壺井栄、石上玄一郎、北原武夫、大田洋子の七作家を並べてゐる。(略)／「中央公論」の新人特選では真杉静枝の「風の町」壺井栄の「赤いステッキ」北原武夫の「家族」ぐらゐのもので、太宰治の「駆込み訴へ」は、キリストを売るイスカリオテのユダの独白調にも、太宰独特の冴え冴えしたものは見当らない。本人は奇をてらはうとしてゐるのでもあるまいが、少し考へたほうがよいと思ふ。

浅見淵「文芸時評」(「文学者」第二卷第三号、昭和十五年三月一日)には、つぎのように記されている。

太宰治の「駆込み訴へ」(中央公論)は、この作者の一つの面である話述の巧みさを發揮した作品である。が、その話述が選ばれた言葉で流暢に展開してゐて棘が無いことが、つまり、サワリの連続であることが切実感をなくしてゐる。それから、この作品に出てくるキリストは太宰治ソツクリだが、太宰治はいつのまにキリストになつたのであらうか。これは冗談だが、太宰治の世間感といふものをユダを借りて来て吐露してゐるわけだが、大掛かりすぎたことが裝飾が勝つて形骸的な作品にしてしまつてゐる。

林房雄「新人の世界—文芸時評—」(「文学界」第七卷第三号、昭和十五年三月一日)には、つぎのように記されている。

さて、かくも氣取つた書出しで始めたのは、「中央公論」の「新人創作特選」を読んで、とても楽しかつたからである。／まことに粒ぞろひである。よくも揃へた、よくも書いてくれた、と申さうか。／敢て新風とは言はぬ。この七つの短篇の中に葡萄をみのらす風や世を吹き枯らす風が吹いてゐるといつては、誇張になるし、嘘にもなるし、——私の理想主義もそれほどには甘くない。／第一、太宰治、長谷健、真杉静枝、壺井栄、石上玄一郎、北原武夫、大田洋子と列んだ顔は、立見席の客には新しい顔触れと見えるかもしれないが、私如き文壇ずれのしたも
のには、まことに古色蒼然、舞台裏十年の苦勞の皺まで眼について、あゝこれが新人か、いやこれが新人なのだと、胸のハンカチに手をやりたくさへなる。／(略)／そこで、新人の諸氏の作品に就くことにする。頁の順に従つて、

先づ、太宰治「駈込み訴へ」／最初の頁で島原か長崎あたりの切支丹物語かなと思つて読みはじめると、次の頁で、おやおやユダか、西紀元年のユダの物語かと気がつく奇妙な文体の作品である。／キリストに就いて、ユダに就いて、聖書に就いて、一家言をもつたつもりであるものは、こりや乱暴に過ぎるわいと思ふか、なんだ、ありきたりの解釈ぢやないか、この種のユダ解釈なら、何度も読んだ、と言ひたくなる小説だ。私も途中で、幾度かさう思ひ、太宰治のために惜む氣持にさへなりかけた。／實際、うつかり読んでは、そのやうな印象を與へかねない作品である。現に、石坂洋次郎氏は、読売の時評で、この作品を、／「キリストを売るユダの独白である。作者の野心はともかく、作品としては成功してゐない。これを読めば、聖書の簡潔な美しい記述が思ひ浮ぶし、ユダの解釈にも新味がない。題材がいけなかつたと思ふ。神罰恐るべしといふわけか。」／と軽く突放してゐる。／だが、私は先きにこの作品を読んだから、この批評にはうなづかなかつた。やはり、太宰治といふ奴は、文学の大切な狙つてゐる奴だ、新人中の新人だと、一部具眼の士が期待をかけてゐる理由も、これで解かると思つた。（自身、彼の特異さにひかれながら、その特異さの正體がつかみきれず、案外偽物かもしれぬぞと、何度か匙を投げかけた「批評家」の一人であつたから。）／「駈込み訴へ」の中に描かれてゐるものは、ユダでもなければキリストでもない。太宰治自身の姿だ。——この言ひ方は平凡に聞えるだらう。「ボブリー夫人は私だ」に倣つて、「この小説家の主人公は作者自身だ」とは誰でもいへる。どんな小説に就いてもいへる。だが、私はそんなことを言はうとしてゐるのではない。太宰治は、もつとぎりぎりなところまで來てゐる。／小説家といふものは、理想または愛情に頼れば、誰れでも一通り人を動かす作品が書けるものだ。（もつと氣樂にかまへて、常識と道徳とに頼れば、大いに売れる小説も書ける。）職人——がいけなければ——技術者としての腕が或る程度まで磨けてくれば、適当な理想によつて、人生を割り切るか、適度な愛情の包装紙で人生を包めば、まあ名作が出来、立派な小説家として通用する。／だが、こゝに、理想にも愛情にも頼れなくなつた作家があつたら、どうするか？ 頼りきつてゐた理想も

愛情も二つながら無残に眼の前で崩れ落ち、ただ裸か身の「自己」に「人間」に突きあたつた作家があつたらどうするか。／彼のやることは、泣き面である、齒嚙みである、天に向つて唾を吐くか、われと我が身に爪を立てるか——人が見たら自棄のやん八としか見えない狂態である。／作家がそんな境地に墮ちてしまつたら、作家たることをやめるよりほかはない。彼の作品は悲鳴と号泣と、自嘲と虚栄と、背徳と頹廢に充ちて、即ち世に通用しないからだ。／だが、怖るべきことには、まことの文学の道は、この境地から始まる。己が裸身を、悪鬼の相を映じた大いなる神の手によつて眼の前に突きつけられ、外科医のメスよりも鋭い利剣によつて、皮膚をはがれ、肉をめくられ、内臓の裏側まで切裂かれて、「見よ、これがお前だ、これがお前の肉で、これがお前の骨だ、どの骨の中にお前の理想がある、どの肉の中にお前の愛情があるといふのか、自惚れるな、お前の身体はどこにもそんな洒落れたものはかくれてゐないぞ、あるものはたゞ汚れた血だ、臭い胆汁だ！ 獣物め、わらし虫め……ふん、泣いたな、涙で俺がごまかせると思つてゐるのか、俺はお前の神の子面をひんむいてやるために、お前を裸にしお前を斬裂いてやつただけだ、さあ泣け、もつと泣くがよい、涙はお前の傷によくしみるだらう、馬鹿者奴！」／私はまだ小説が下手なので、うまく描写できないが、この悪鬼神の言葉は、もつと残酷で、もつと物凄いののだ。自分の耳で聞いたら、骨の髄まで凍つてしまふ。だから、この悪鬼神に見舞はれた人間は、気がちがふか逃げ出すか、それよりほかに方法はない。気がちがへば、それまでで、逃げ出せば通俗作家になつてしまふ。（白状するが、実は私は、この悪鬼神に襲はれるたびに、巧みに尻尾を巻いて逃げ出す型の作家の一人だ。——太宰治のこの小説を「神罰恐るべしといふわけか」などと笑ひとばした石坂洋次郎先生も、あぶないぞ！）／然るに、太宰治は感心にも、逃げ出さなかつた。彼の長きにわたる「狂態」を見よ。狂ひ咲きの天才にあらずんば、世渡りのための啖狂か、果して何者ぞや、と読者をまどわし、私を困らせた彼の狂行と狂作品は、今にして思へば、この悪鬼神との格闘であつた。／この神と格闘しては、負けるにきまつてゐる。負けて負けて負け抜いたときに、わが足もと、わが行く手に

文学の本道が開けてゐた。しかも、文学の悟りは、禪坊主の悟りとはちがつつて、豁然と大悟した途端に、身心脱落して、とてもいゝ氣持になり、明日からは紫衣をまといつて一山の和尚になれるといふわけには行かないらしい。道を発見した後に、本式の苦行難行が始まる。——困つた話だ。太宰治よ、苦しからう。楽しかつたら、偽りの悟りだぞ。／＼で、本題に入つて、再び繰りかへす。「駄込み訴へ」はユダの新解釈など、つまらんことを企てた作品ではない。——これは、——笑ひ給ふな——縁日の「浮沈子」を描いた哀れな悲しい苦しい作品だ。／＼浮沈子とは、今の縁日にはもうないかもしれない。私の子供の頃には、田舎の祭に香具師がよく持つて来た。／＼大きな硝子の筒の中に水が一杯入つてゐて、その中にセルロイドの軽気球や蛸坊主どもが浮いてゐる。香具師が筒の口を掌で蓋をして、口笛を吹きながら、ちよい／＼と手加減すると、軽気球と蛸はふら／＼と沈み、沈んだと思ふとふらふらと浮び、沈み、浮び、沈み……読者よ、思ひ出しましたか？／＼神と悪魔、超人と猿——この両極の間を永遠にふらつく「我らの魂」を、太宰治は「駄込み訴へ」の中で、まことに見事に描いてくれた。／＼言ふまでもなく、この主題は、思想としては、決して新しいものでも珍しいものでもない。だが、この魂の現実に動く姿を文字にとらへることは至難である。人間の心の動きは光よりも早い。その方向の轉換は、切りかへられた電流よりも早く、かの「浮沈子」のふら／＼振りとはちがふのである。それを、太宰治は見事に描いた。（こゝで、ドストエフスキイを引合ひに出すことは、やめておかう。——話をあまり大袈裟にすると、読者は信用してくれないから。）／＼太宰治は、まさに新人である。このやうな作品は、かの悪鬼神と正面から取り組んだ奴でなければ——そして、まことの文学才能を恵まれたものでなければ、書けないからだ。

十返一「新興作家論」（三田文学）第十五巻第八号、昭和十五年八月一日）については、「善蔵を思ふ」の項を参照のこと。

中村地平「太宰治著『女の決闘』（『新潮』第三十七年第八号、昭和十五年八月一日）には、つぎのように記さ

れている。

「駢込み訴へ」「走れメロス」は古典的物語の新しい解釈といふよりか、自己の人生感をその物語りのなかに仮托して述べようとしたもの、「古典風」「誰も知らぬ」「春の盗賊」などはすべていくらか読みもの的に軽い。「善蔵を思ふ」一作の方がはるかに大宰的と言へるであらう。

三上秀吉「太宰治著『女の決闘』『思ひ出』」(「文学者」第二巻第八号、昭和十五年八月一日)については、「女の決闘」の項を参照のこと。

平山吉璋「太宰治の小説と私」(「こをろ」第三号、昭和十五年九月二十八日)には、つぎのように記されている。前述した、氏の作の外に、私は、「女生徒」「皮膚と心」「走れメロス」「駢込み訴へ」「盲人独笑」等の作物に目を通したが、「走れメロス」以下の三は、全く認める気がしない。成る程、之らの作品の如き、或は一つのタイプではあるかも知れないが、乍然、まづとうな行き方では、決してない、必ず時の淘汰に遭ふ性質を有するものである。／＼が然し、前二者の、女性の、すぐれた心理描写から成る、立派な作品は、讃辞を呈するに、私と雖も、いささかも吝ではない。――

岩上順一「太宰治の一面」(「三田文学」第十六巻第二号、昭和十六年二月一日)には、つぎのように記されている。

「駢込み訴へ」はイスカリオテのユダのことを素材にしたものである。基督を売ったこのユダのことについては、恐らく基督教に關係のある時代のすべての国民が、頭の痛くなるほどに考へさせられて来たものであらう。ユダは基督と同じく、時代や国民を貫いて生きつづけて来てゐると言ふべきだ。素朴な言葉で言ひかへて、もし基督を愛と眞実の大典型だとしたら、ユダは憎悪と背信の権化であらう。彼等兩人はいはば人間性の二つの極点を表現して居るのだ。それ故、人間は自らの中に基督を発見すると同時にユダを発見する。彼等兩人の運命は、それ故にひろ

く所を超え時をへだててすべて人間の心を動かさずにはゐないのだ。／もちろん、このやうなユダ的眞實は太宰氏の心を動かさずにはゐないであらう。しかしこのやうな感動だけでは、それを作家の眞實、作品の眞實にまで高めることはできない。ユダの物語を新しく發見し、その中に作家自らののつびきならぬ告白をこめ、かくしてかかる伝説に新しい生命を吹きこむだけの、全生活的な作家の眞實といふかまたは愛情といふがそこになければならぬ。それはいつたい何であらうか。／私はかくして、太宰氏の他の作品を読みかへして見ざるを得なかつた。迂濶にも、それを見て、はじめて私は、「走れメロス」や「駈込み訴へ」やまた最近の佳作「きりぎりす」などが、どうして生れて来なければならなかつたかを理解することができたと思ふ。

宮田戊子「太宰治氏の『東京八景』其他」(『近代日本文学の分析』霞ヶ関書房、昭和十六年十一月十八日)に就いては、「東八八景」の項を参照のこと。

内海伸平「太宰治論」(『赤門文学』第二卷第九号、昭和十七年九月一日)には、つぎのように記されている。

更に私は「駈込み訴へ」「走れメロス」「新ハムレット」等に於て、自己の刻々の心境、大きく云へば人生觀賞の態度更には古典解釈を披瀝してゐる彼の姿を新しい戯作者と見るなら、どんな變つた答が出て来るか。私の勝手な手前味噌であるが、批評とは、多かれ少かれ手前味噌だとは夷狄の天才ゲーテの言葉にもある。太宰の如き一筋縄ではゆかぬ「近代の鶴」を射とめようとするなら、右手に私小説、左に戯作者と云ふ二刀流使ひの卑怯も許されたい。私は私小説の廢墟の上に、戯作者的小説が復活したと云ふのではなく、此の二つの傾向は同時に而も矛盾なしに作家の裡に存在するものと思つてゐる。それにしても、作家の本質規定等といふものは、その人が棺に入つて始めてわかるものであつて、生ける人を、特に彼の如き変貌自在な作家の本質規定は殆ど不可能だと云ふ事もついでに云つておきたい。既に泣きごとである。確に批評と云ふものは貧血症の口舌の徒がやる仕事であらう。男子一生の仕事にあらず。

このころ(3)・国民新聞・第一七三十一号・昭和十五年二月一日発行・8面・「学芸」欄

翻印状況については、「このころ(1)」の項を参照のこと。

〔付記〕 振仮名付。末尾に「(終)」とある。

鬱屈禍・帝国大学新聞・第七百九十八号・昭和十五年二月十二日発行・7面・「文学」欄

『思ひ出(太宰治短篇傑作集)』(人文書院、昭和十五年六月一日)に、「近事片々」の総題の下に全文収載された。

『信天翁(太宰治文藻集)』(昭和書房、昭和十七年十一月十五日)に、全文収載された。

『太宰治随想集』(若草書房、昭和二十三年三月二十一日)に、全文収載された。

『太宰治全集第十六巻もの思ふ葦(近代文庫23)』(創芸社、昭和二十七年七月一日)に、全文収載された。

〔付記〕 振仮名付。署名「太宰治」。

老ハイデルベルヒ・婦人画報・三月号、第四百三十三号・昭和十五年三月一日発行・171~178頁

『皮膚と心』(竹村書房、昭和十五年四月二十日)に、全文収載された。

『老ハイデルベルヒ』(竹村書房、昭和十七年五月二十日)に、全文収載された。

『八十八夜』(南北書園、昭和二十一年三月一日)に、全文収載された。

『八十八夜(太宰治短篇集)』(南北書園、昭和二十二年二月二十五日)に、全文収載された。

『八十八夜』(南北書園、昭和二十三年八月一日)に、全文収載された。

『太宰治全集第五巻駈込み訴へ』(八雲書店、昭和二十三年十一月三十日)に、全文収載された。

〔付記〕 目次には「老ハイデルベルヒ」とある。

女の決闘(中篇)／連載第三回・月刊文章・三月号、第六卷第三号・昭和十五年三月一日発行・29~35頁・「創作」欄

翻印状況については、「女の決闘(中篇)／連載第一回」の項を参照のこと。

〔同時代評〕「女の決闘（中篇）／連載第一回」の項を参照のこと。

〔付記〕「第三。」を収載。本文末尾には「（以下次號）」とあり、目次には「女の決闘 中篇」とある。

酒きらひ・知性・三月号、第三卷第三号・昭和十五年三月一日発行・94頁

『思ひ出（太宰治短篇傑作集）』（人文書院、昭和十五年六月一日）に、「近事片々」の総題の下に全文収載された。

『太宰治随想集』（若草書房、昭和二十三年三月二十一日）に、全文収載された。

『太宰治全集第十六巻もの思ふ葦（近代文庫23）』（創芸社、昭和二十七年七月一日）に、全文収載された。

知らない人・書物展望・三月号、第十卷第三号、通巻第百五号・昭和十五年三月一日発行・49頁・「隨筆」欄

『思ひ出（太宰治短篇傑作集）』（人文書院、昭和十五年六月一日）に、「近事片々」の総題の下に全文収載された。

『太宰治随想集』（若草書房、昭和二十三年三月二十一日）に、全文収載された。

『太宰治全集第十六巻もの思ふ葦（近代文庫23）』（創芸社、昭和二十七年七月一日）に、全文収載された。

無趣味・新潮・三月号、第三十七年第三号、通巻四百二十六号・昭和十五年三月一日発行・山頁・「近影二葉」欄

『如是我聞』（新潮社、昭和二十三年十一月十日）に、全文収載された。

『太宰治全集第十六巻もの思ふ葦（近代文庫23）』（創芸社、昭和二十七年七月一日）に、全文収載された。

〔同時代評〕高見順「文芸的雑談―言ひ方―」（『都新聞』昭和十五年二月十五日）には、つぎのように記されている。

南川君は、自分にはこんな器用な真似はできない、こんな器用な真似は嫌ひだと言ったが、これは下手な言ひ方だと思ふ。器用な真似は嫌ひだといふだけでいいのだ、自分は出来ないは余計だ。／太宰治君も、「新潮」三月号の「無趣味」といふ感想で、さうした下手な言ひ方をしてゐる。「私は衣食住に就いては、全く趣味が無い。大いに衣食住に凝つて得意顔の人は、私には、どうしてだか、ひどく滑稽に見えて仕様が無いのである。」もつともな意見だが、私は云々は余計だ。それで、もつともな意見がおちこはしに成る。若さのせるだらうか。

〔付記〕 写真一葉と共に掲載。他の一葉は深田久彌「寫眞道樂」。

作家の像(上)・都新聞・第一万八千八百廿五号・昭和十五年三月二十五日発行・1面・「文芸」欄

『信天翁(太宰治文藻集)』(昭南書房、昭和十七年十一月十五日)に、全文収載された。

『太宰治随想集』(若草書房、昭和二十三年三月二十一日)に、全文収載された。

『太宰治全集第十六巻もの思ふ葦(近代文庫23)』(創芸社、昭和二十七年七月一日)に、全文収載された。

〔付記〕 「(日刊)」。振仮名付。三月二十七日まで、三回連載。

作家の像(中)・都新聞・第二万八千八百廿六号・昭和十五年三月二十六日発行・1面・「文芸」欄

翻印状況については、「作家の像(上)」の項を参照のこと。

〔付記〕 「(日刊)」。振仮名付。

作家の像(下)・都新聞・第一万八千八百廿七号・昭和十五年三月二十七日発行・1面・「文芸」欄

翻印状況については、「作家の像(上)」の項を参照のこと。

〔付記〕 本文末尾に「(をはり)」。「(日刊)」。振仮名付。

諸君の位置・月刊文化学院・二月号、第二巻第二号、No. 9・昭和十五年三月三十日発行・13～15頁

『信天翁(太宰治文藻集)』(昭南書房、昭和十七年十一月十五日)に、全文収載された。

『太宰治随想集』(若草書房、昭和二十三年三月二十一日)に、全文収載された。

『太宰治全集第十六巻もの思ふ葦(近代文庫23)』(創芸社、昭和二十七年七月一日)に、全文収載された。

〔付記〕 初出誌の、表紙には「No. 9」「昭和十五年二月二十日印刷納本」「昭和十五年二月二十三日発行」とあり、

目次には「1940/月刊文化学院第二巻第二号/二月号」とあり、奥付には「No. 9」「昭和十五年二月二十七日印刷納本/昭和十五年三月三十日発行」とある。なお、「編輯後記」には、「此の号が羽仁五郎氏、太宰治氏、その他の

人々の原稿により多少とも文芸的な色彩を帯びる事となつたとしても、月刊文化学院の底を流れるものに變りはないのである。此の号が、少しでも目先が變つたといふ事になれば、編輯者にとつて本望なのであるが、本望な所まで行かずにゐる。」とある。「月刊文化学院」は「東京市神田区駿河台二ノ五／文化学院」の發行。

善藏を思ふ・文芸・四月号、第八卷第四号・昭和十五年四月一日發行・62頁78頁

『女の決闘』（河出書房、昭和十五年六月十五日）に、全文収載された。

『女神』（白文社、昭和二十二年十月五日）に、全文収載された。

『誰も知らぬ』（ロッテ出版社、昭和二十三年八月十五日）に、全文収載された。

『太宰治全集第五卷駈込み訴へ』（八雲書店、昭和二十三年十一月三十日）に、全文収載された。

〔同時代評〕 嵯峨伝「創作月評」〔新潮〕第三十七年第五号、昭和十五年五月一日）には、つぎのように記されている。

太宰治の「善藏を思ふ」を読んでもるうちに、いまの時代では善藏を思ふものが少くなつてゐることが考へられると同時に、かういふ小説も善藏の如く、次第に顧みられなくなるであらうことが、無理もなく首肯されて来る。

無署名「文芸」〔三田文学〕第十五卷第五号、「今月の小説」欄、昭和十五年五月一日）には、つぎのように記されている。

善藏を思ふ・太宰治／この作者のスタイルも今日此頃では食傷気味である。作者自身が少々もてあましてゐるのではないかと思はれる節も、この作品に於て見受けられる。結局、トリビアルな身辺雑記的素材を一応自分の文章でひねつてゐるにすぎないのであつて、殊更な自己卑大の表現が只單なる厭味をのこしてゐるのは危険である。

Q・P「作品短評」〔文芸〕第八卷第五号、昭和十五年五月一日）の「太宰治『善藏を思ふ』」の項には、つぎのように記されている。

二つの挿話のしつくりしない憾はあるが、独自の個性と巧緻な文体で読ませ、太宰の才能が漸く根を張つてきたことを感じさせる。

十返一「新興作家論」(「三田文学」第十五卷第八号、昭和十五年八月一日)には、つぎのように記されている。

一見さうした人生に対する甘えたところがないやうで、その実甘つたれてゐるのが、太宰治の文学である。彼の文学が酷烈な自意識の産物であり、ダダイズムに通ずる激しさが在るなどと観るのは錯覚である。およそ太宰の文学は、さういふぎりぎりのものとは反対な、本能の無反省な狂言である。性格破産などといふものは、もつと究極の悲壮を持つてゐるものだ。むしろ此の作家の良さは「女生徒」が示すやうな一種の喫茶店の明朗さである。「懶惰の歌留多」とか「駈込み訴へ」などに著るしい道化役者的悲劇の身振りの扮飾を捨てきらなければ太宰治は救はれない。「善藏を思ふ」は、かかる彼の時代と切り離された安易さと、内面追求の貧寒を最も暴露した作品である。／＼しかも、かゝる太宰治の文学が今日「流行化」した所以は、この安易さと大袈裟なポオズにある。それが一見、時代と人生の追求を思はせるところに、毫碌した既成意識が引つかかるのだ。然し一たい彼の文学に時代の危機を刳つて眼を蔽ひたいやうな痛烈なものが、果してあるか。あると思ふのは、真に時代の危機や人生の酷烈さに心身を投げ出さないものどもである。寧ろ太宰文学の魅力は、朗らかに自分を歌つてゐる世間知らずな初々しさである。それが古い人たちには新しく観えるのだ。

中村地平「太宰治著『女の決闘』」(「新潮」第三十七年第八号、昭和十五年八月一日)については、「駈込み訴へ」の項を参照のこと。

岩上順一「太宰治の一面」(「三田文学」第十六卷第二号、昭和十六年二月一日)には、つぎのように記されている。

このやうな激しい自卑自嘲と、自分自身の才能や努力への信頼とが、同時に刻々と相争ひ、互ひに他を噛み倒さ

うとしてゐるその内的風景は、その後の作品「俗天使」（新潮、昭和十五年新年号）のなかで「耻辱を告白すること、わづかな誇りを持ちたくて、書いてゐるのだ」といふ言葉のなかにも見られるが、更に一層はつきりと、それは「善藏を思ふ」のなかに表現されてゐるのではなからうか。／この作品は昭和十五年四月号の「文藝」誌に発表されたものである。「善藏を思ふ」といふ題名そのものからして葛西善藏の世界を思はせる。この作家が葛西善藏や嘉村磯多の文学的系列を継ぐものであることは、こゝらあたりからでも、探り出すことができるであらう。しかし、それはともかくとして、「善藏を思ふ」は、この作家のもつ、自分自身を含めて一般に人間全体に対する、切ない信頼と深い絶望との、もつともはげしい相剋を告白したものである。／この作家は故郷の新聞社から在京芸術家の会合に招待され、出席の返事を書くが、その瞬間から、この作家独得とも言ふべき自信と自卑との猛烈な噛み合ひが始まるのだ。作家は書いてゐる。／「自身の弱さが——うかうかと出席を返事してしまつた自身のだらしなさが、つくづく私に怨めしかつた。すべては、私の愚かさ故である。」／こゝまでは自卑である。ところが、これに続く次の言葉を見よ。／「いつそかうなれば、度胸を据ゑて、堂々、袴はいて出席し、てんとして名士の振りを装ひ、大演説でも、ぶつてやらうかと、やけくそに似た荒んだ根性も頭をもたげ、世の中は、力だ、飽くまでも勁く押して行けば、やがてその人を笑はなくなり」といふ。とてつもない強がりではないか。しかもこの強がりが一瞬のうちに無惨な自省につき落されるのだ。／「やがてその人を笑はなくなり、ああ、浅墓だ、恥を知れ！ 袴をはいて出席し、大演説、などといきり立つて見るのだが、私は駄目だ。人に迷惑をかけてゐる。善い作品を書いてゐない。みんな、ごまかしだ。不正直だ嘘つきだ。好色だ。弱虫だ。しどろもどろだ。告白する。私は、やつぱり袴をはきたかつたのである。」／ともかく、仙台平のかはりにアイロンのかかつたセルの袴ではあるが、一着に及んでこの作家は自らを宴会場の末席に坐らせる。そして葛西善藏のやうにガブガブ酒を引つ掛けながら、たうとう大失態を演じる。（とこの作家は自ら思ひこんでゐる。）我ながら愛想がつきるといふのである。／ところで。

の作家は、質百姓から八本の質薔薇(?)を買ひ込んだと信じてゐたが、この宴会の数日後来た友人から「これは、なかなか優秀の薔薇だ」と保証され、急に人間の善さにうたれるのだ。／「私は縁側に腰かけ煙草を吸つて、ひとかたならず満足であつた。神は、在る。きつと在る。人間到るところ青山。私は自分を、幸福な男だと思つた。」といふのである。／要するに「善藏を思ふ」のなかには、人間の善さと悪さとに對する作家の心の動揺が、一瞬の休止もなしに迅速に振動し、その動揺の混沌のなかに、作家のもつ内部的矛盾と葛藤を、ふしぎな生々しさで真実のものとしてゐるのだ。／そして、ここで、特に目に立つのは、人間の弱点、人間の心に潜む悪魔、不誠実、悪巧み、背信等々、人間性の否定的一面を極度に敏感に追及しようとする、故意なまでの告白者の態度である。／「駈込み訴へ」のなかの、背信者ユダの心理と行為とに依つて表象されてゐる、あの、自己を含めて人間に對する、底知れぬ恐しい不信と絶望の自己告白は、次の如き言葉となつてゐる。／「私は人生の検事でもなければ、判事でもない。人を責める資格は私にはない。私は悪の子である。私は業がふかくて、おそらくは君の五十倍、百倍の悪事をした。現に、いまも、私は悪事をなしてゐる。どんなに氣をつけてゐても、駄目なのだ。一日として悪事を為さぬ日は、無い。神に禱り自分の両手を縄で縛つて地にひれ伏してゐながらも、ふつと氣がついた時には、すでに重大な悪事を為してゐる。私は鞭打たれなければならぬ男である。血潮噴くまで打たれても、私は黙つてゐなければならぬ。」／私はこれらの言葉をバイブルの何処かで必ず讀んだと記憶する。もしも言葉として讀まなかつたとしても、言葉の内容として、思想としては確かにバイブルの世界であると信じる。そして、これらの言葉が、生活の実感からすり抜けて、幾分言葉のための言葉に墮ちつつあるのを感じる。太宰氏に於ける悪の意識はまだ生活的なものとなつてゐないことを感じる。氏の悪は生活の悪ではなく、悪に関する知識または觀念に過ぎないことを感じる。つまり太宰氏は、悪なるものを、最初は自己内心に即した具体的事実として認識しながら、次第にかかる悪そのものから具体性を捨て去り、遂には悪一般、「悪」の觀念のなかに陶酔的な自己苛責を営まうとするのである。この

やうな観念性が氏の一面にあることは確かに見逃せない。／＼氏に於ける惡の観念のこのやうな追及の執拗さは、全く息苦しいものである。それは読者にとつて、人間の積極的な善い方の面やその他の複雑な生活の豊かさへの思慕が頑固にも否定されかねないことから、そのやうに感じられるばかりでなしに、作者自身にとつても、全く八方ふさがりの世界となつてやり切れないものであらう。惡の追及がはげしくなればなるほど、この作家はそのやうな暗闇の世界から、もつと光のある世界に出たい心を、ますます駆り立てられずにはゐられないであらう。「駈込み訴へ」や「善藏を思ふ」のこのやうな息詰まる自己苛責が鋭敏に深刻になればなるほど、それから抜け出し、もつと自由な、清らかな、空氣と光に溢れたおほらかな世界を欲する心は、益々切実な、全生活的願望とならざるを得なかつたであらう。

内海伸平「太宰治論」(「赤門文学」第二卷第九号、昭和十七年九月一日)には、つぎのように記されている。

太宰文学の本質規定に入らう。前に私は、彼にレッテルを貼るなら「変つた私小説家、(実は戯作者)」と云ふ、両頭両身の畸形児の如き名前を与へたが、之も一筋縄ではゆけぬ窮余の一策ではある。ロマン派、デカダン派等と簡單裁断批評するよりは、余程上等ではないかと己惚れてはゐるものゝ、余り自信はない。今流行の私小説論で少々気がひけるが、彼を私小説家の系譜から見たら、或は變つたものが出て来はしまいか、そう考へる理由には、太宰文学が外相の爛熟さに比して、その根底に葛西善藏流の私小説な血液を感じるが故である。その情は、短篇「善藏を思ふ」と云ふその題名からも想像されるのであるが、初期の作品から、名作「東京八景」を経て、近作「風の便」に至る迄、一貫して流れるものは、肉体を失つた自我の探究と、しかもそれを執拗に表現せんとしてのたうち廻る自意識の横転逆転を無法に投げ出した奇怪な私小説であつた。むろん彼ほど、嘘とほらと誇張とを作品の中でも云つた作家はないであらう。が、すべては、いつはらざる自己を告発せんが為に。私はここに「近代の私」を感じ、私小説の伝統の最後の洗練された芸術的表現を味ふ。葛西善藏や嘉村磯多の文学的系列を継ぐ最後の私小説家

と云へやう。此の私小説家が告白してゐる「私」を此の評論の追求の軸としてゆくときはやはり、この「私」と断ちがたく関連してゐる「近代」の形成とその本質の解明にまでさかのぼる事にならう。

〔付記〕 昭和十四年十月中旬の脱稿と推定される。

女の決闘／（中篇）連載第四回・月刊文章・四月号、第六卷第四号・昭和十五年四月一日発行・27～33頁・「創作」欄

翻印状況については、「女の決闘（中篇）／連載第一回」の項を参照のこと。

〔同時代評〕 「女の決闘（中篇）／連載第一回」の項を参照のこと。

〔付記〕 「第四。」を収載。本文末尾には「（以下次號）」とあり、目次には「女の決闘 中篇」とある。

誰も知らぬ・若草・4月号、第十六卷第四号・昭和十五年四月一日発行・14～20頁・「小説」欄

『女の決闘』（河出書房、昭和十五年六月十五日）に、全文収載された。

『女性』（博文館、昭和十七年六月三十日）に、全文収載された。

『女神』（白文社、昭和二十二年十月五日）に、全文収載された。

『誰も知らぬ』（ロッテ出版社、昭和二十三年八月十五日）に、全文収載された。

『太宰治全集第五卷駈込み訴へ』（八雲書店、昭和二十三年十一月三十日）に、全文収載された。

〔同時代評〕 中村地平「太宰治著『女の決闘』（『新潮』第三十七年第八号、昭和十五年八月一日）については、「駈込み訴へ」の項を参照のこと。

三上秀吉「太宰治著『女の決闘』『思ひ出』（『文学者』第二卷第八号、昭和十五年八月一日）には、つぎのように記されている。

「神に酔へるスピノザ」といふ言葉がある。冷血餓的なスピノザもなほ神に酔ふ熱情は、人間にたふといものである。冷たい、憂鬱な、虚無の、自虐の世界から、ほつと、心理小説の世界に抜け出てきて、そこでは人間の心の

奥に渦巻き流れる葛藤を描く。善と悪、神と悪鬼、真実と偽り、これは永遠にくめどもつきぬ泉であり、濁流であり、売れども売りつくせぬ競市場、そのたゞき売に酔へるが如く、やがて憤りは、くたくたになつたところから、おのれの内部の淵に、さんげの白い花を咲かせる。それ故に気が弱い。可憐である。さういふ消息は、女のひそかな愛情を描いた「誰も知らぬ」の中に描かれてゐるのである。／＼しかし私自身の好みからいへば、そのやうな才氣ハツラツとした、きは立つた新風のものよりも、処女作らしい「思ひ出」や、昭和十四年作「富嶽百景」などに、すなほな好意は持てるのである。

〔付記〕 Hの「編輯後記」には、「今月、小説欄は、花春に相應しく、新進の、しかも、夫々特異な作風を以て、文壇にユニツクな存在を示す坂口、太宰二氏の異色ある好短篇、それに評論家、田辺耕一郎氏の、温雅な心境を通して綴られた、苦悶多き美しき青春の書ともいふべき「早春」をもつて飾りました。」とある。

義務・文学者・四月号、第二巻第四号・昭和十五年四月一日発行・220頁・「隨筆」欄

『信天翁（太宰治文藻集）』（昭南書房、昭和十七年十一月十五日）に、全文収載された。

『太宰治隨想集』（若草書房、昭和二十三年三月二十一日）に、全文収載された。

『太宰治全集第十六巻もの思ふ葦（近代文庫23）』（創芸社、昭和二十七年七月一日）に、全文収載された。

女の決闘（中篇）／連載第五回・月刊文章・五月号、第六巻第五号・昭和十五年五月一日発行・6頁・13頁・「創作」欄
翻印状況については、「女の決闘（中篇）／連載第一回」の項を参照のこと。

〔同時代評〕 「女の決闘（中篇）／連載五一回」の項を参照のこと。

〔付記〕 「第五。」を収載。本文末尾には「（以下次號）」とあり、目次には「女の決闘 中篇」とある。なお、「編輯後記」には、「今月の創作欄は、伊藤氏、太宰氏の連載作品の他に、鈴木清次郎、平川虎臣二氏の作品を得ることが出来た。」とある。

走れメロス・新潮・五月号、第三十七年第五号、通巻四百二十八号・152～163頁・「創作」欄

『女の決闘』（河出書房、昭和十五年六月十五日）に、全文収載された。

『富嶽百景（昭和名作選集28）』（新潮社、昭和十八年一月十日）に、全文収載された。

『水仙（文芸春秋選書4）』（文芸春秋新社、昭和二十三年七月二十日）に、全文収載された。

『女の決闘（太宰治代表作集）』（新潮社、昭和二十三年七月二十日）に、全文収載された。

『女生徒（青春の書12）』（鎌倉文庫、昭和二十三年八月十五日）に、全文収載された。

『太宰治全集第五巻駈込み訴へ』（八雲書店、昭和二十三年十一月三十日）に、全文収載された。

〔同時代評〕 嵯峨伝「創作月評」（『新潮』第三十七年第六号、昭和十五年六月一日）には、つぎのように記されている。

太宰治の「走れメロス」はいふほどのこともない。

無署名「新潮」（『三田文学』第十五巻第六号、「今月の雑誌」欄、昭和十五年六月一日）には、つぎのように記されている。

太宰治氏の「走れメロス」は人間の誠実を疑ふ暴君ディオニスと、真実の徒メロスとの短いお話である。（古伝説と、シルレルの詩から。）と、註がしてあるが、太宰氏らしい達者な手法の短篇である。

K・G「作品短評」（『文芸』第八巻第六号、昭和十五年六月一日）の「太宰治『走れメロス』」の項には、つぎのように記されている。

伝説からとった物語だが、先頃のユダなどより才気がガラガラしないで、数倍素直に愉しい。更に簡潔に書かれてあつたら好小品となつたであらう。

三上秀吉「太宰治著『女の決闘』『思ひ出』（『文学者』第二巻第八号、昭和十五年八月一日）については、「女

の決闘（中篇）／連載第一回」の項を参照のこと。

中村地平「太宰治著『女の決闘』」（『新潮』第三十七年第八号、昭和十五年八月一日）については、「駆込み訴へ」の項を参照のこと。

平山吉璋「太宰治の小説と私」（『こをろ』第四号、昭和十五年九月二十八日）については、「駆込み訴へ」の項を参照のこと。

岩上順一「太宰治の一面」（『三田文学』第十六卷第二号、昭和十六年二月一日）には、つぎのように記されている。

私が太宰治氏の作品にはじめて心を惹かれたのは極最近、と言つても新潮の六月号で「走れメロス」といふ短篇を読んだ時であつた。それから以後の作品はつとめて注意して読むやうになつたが、それ以前の作品については殆んど知らなかつた。私が自ら、一面観と称する所以である。／＼ところで「走れメロス」は非常に面白かつたし、また非常に立派な作品だと思つて、私はノートを取らうとした位であつた。それはこの作品のなかに、非常に高い主題が含まれてゐると思つたからである。／＼ここに高い主題といつたのは、その主題が何千年もの間人々の間に生き、人々をより高いものへと感動させて来た古い伝説のもつ深い力のことを意味したい。メロスがその友人セリヌンテイウスに抱く友情への死をかけた誠実が、遂には暴君ディオニスの不信と疑惑に満ちた心を征服するといふこの伝説の中には、言ふならば人間性の普遍的な美しい一面が強く生きてゐるのだ。そこにはギリシア人であらうと、ローマ人であらうと、またゲルマニア人であらうと、彼等すべての民族的国民的な個性を超えて、ひとしく胸を打つ人間性の最高の美しさが溢れてゐるのだ。自らの虚偽と不信と墮落と頹廢とに、日夜懊悩し煩悶せざるを得ない憐れな俗人達は、このやうな物語を読む瞬間だけでも、人間のもつ素晴らしい良さに感動するであらう。このやうな友情のありがたさを物語つてくれるこれらの伝説に、その萎え凋む心も、救はれる瞬間を持ちうるであらう。私は

すぐれた伝説や口碑のなかにこそ、もつとも高い人間性の一面がひそんでゐることにあらためて感動させられた。／＼そして、このやうな伝説はすぐれた作家によつて、絶えず発見され、承け続がれ新しく甦るべきであらうと思つた。その意味からしても、この作品は、太宰氏の仕事のうちでもつとも注目すべきものであらうと信じてゐた。私は「駈込み訴へ」を読み返して見るに及んで愈々その感を深くせざるを得なかつた。／＼（中略）／＼実にかかる作家の人間性追及の、このやうな全生活をかたむけた願望のなかからのみ、あの「走れメロス」は生れ得ることができた。「駈込み訴へ」の暗い酷薄と不信のヘブライ的世界は、ここではじめて、ギリシア的な、素朴にして強健な、開放的な人間性の暢達さに到ることができたのである。作家は「走れメロス」のなかでは、まだ不信の苦さを忘れ去つた訳ではない。しかし、力尽きたメロスが友を裏切つたかも知れない危機は、瞬間に克服され、勇士メロスの誇らかな声はその友セリヌンティウスに向つて叫ぶのである。／＼「私を殴れ。ちから一ぱいに頬を殴れ。私は、途中で一度悪い（不信の）夢を見た。君が若し私を殴つてくれなかつたら私は君と抱擁する資格さへ無いのだ。殴れ。」／＼セリヌンティウスは、すべてを察した様子で首肯き、刑場一ぱいに鳴り響くほど音高くメロスの右頬を殴つた。そして言つた。／＼「メロス、私を殴れ。私はこの三日の間、たつた一度だけ、ちらと君を疑つた。生れてはじめて、君を疑つた。君が私を殴つてくれなければ、私は君と抱擁できない。」／＼メロスは腕に唸りをつけてセリヌンティウスの頬を殴つた。／＼「ありがたう、友よ。」二人同時に言ひ、ひとと抱き合ひ、それから嬉し泣きにおいおい声を放つて泣いた。——／＼「青春は、友情の葛藤であります。純粹性を友情に於いて実証しようと思つて、互ひに痛み、つひには半狂乱の純粹ごつこに落れることもあります。」／＼と、作家自ら、この作品の解説として、新潟高等学校の講演会のことを書いた「みみづく通信」のなかでのべている。／＼素朴な純粹な友情と信頼の貫徹。人間性の善と理想の勝利。作家は、それまでの自己苛責、自己暴露の底に、切りさいなみ踏み蹴り、絶叫し、泣訴せんばかりの、押へつけ虐げられてゐた人間への愛情を、ここで、「走れメロス」のなかで、はじめて思ひ切り解きはなち、自由

な、健康な純粹の天地のなかに躍り出さしめた。「走れメロス」が、単なる伝説としての力を超えて、もつともつと生々しく胸を打つ現実性を持ち得たのは、実に作家自身の、このやうな血路的な人間愛情の眞実がそこにこめられてゐたからであらうと思ふ。

小坂松彦「文芸時評―二三の新進作家とその方法―」（『赤門文学』創刊号、昭和十六年十二月一日）については、「女の決闘（中篇）／連載第一回」の項を参照のこと。

内海伸平「太宰治論」（『赤門文学』第二巻第九号、昭和十七年九月一日）については、「軀込み訴へ」の項を参照のこと。

大恩は語らず・昭和十五年五月二十六日頃記

「文章俱樂部」第六巻第七号（七月号、通巻第三十八号、昭和二十九年七月一日）の「太宰治未発表原稿」欄に、野口七之輔「未発表のいきさつ」と共に、全文紹介された。目次には「恩讐記：太宰治」。

『太宰治全集第十巻』（筑摩書房、昭和三十一年七月二十日）に、全文収載された。

〔付記〕「婦人公論」昭和十五年七月号のために、「『復讐』ということをやテーマにした短い随筆」を依頼されて、執筆したもの。だが、同誌には掲載されず。生前未発表のままに過ぎた。初出誌「文章俱樂部」昭和二十九年七月号の「編集後記」には、つぎのように記されている。「今月は太宰治氏の未発表原稿を掲載することができた。この原稿ははじめB誌に発表されるはずであつたが、無理をお願いして小誌にゆづつていただいたものである。短かいエッセイだが、ここには氏の人柄が実によくうちだされている。殊に氏のエッセイは数が少なく、その意味だけでも貴重なうえに、「恩讐」というテーマは常に氏の内部にうずまいていたテーマであつて、管見によればN氏にとよせてみずからの恩讐観を吐露したものにほかならず、太宰研究にみのがしえない資料となることと思われる。この稿を筐中深く秘しておられた野口七之輔氏は、小林多喜二の無二の友人であり、小樽高商時代小林多喜二や伊

藤整氏らと同人雑誌をつくったことがある。」

女の決闘（完結）・月刊文章・六月号、第六卷第六号・昭和十五年六月一日発行・6頁・「創作」欄

翻印状況については、「女の決闘（中篇）／連載第一回」の項を参照のこと。

〔同時代評〕「女の決闘（中篇）／連載第一回」の項を参照のこと。

〔付記〕「第六。」を収載。本文末尾には「（完）」とあり、目次には「女の決闘完結」とある。なお、「編輯後記」には、「太宰治氏の『女の決闘』は今月で好評裡に完結した。雑誌の形態にしばらくは、多くの紙面を割くことが出来なかつたのは残念であつたがこの機会に通読して頂きたいものである。」とある。

古典風・知性・六月号、第三卷第六号・昭和十五年六月一日発行・2頁・「創作」欄

『女の決闘』（河出書房、昭和十五年六月十五日）に、全文収載された。

『ろまん燈籠』（用力社、昭和二十二年七月十日）に、全文収載された。

『太宰治全集第五巻駈込み訴へ』（八雲書店、昭和二十三年十一月三十日）に、全文収載された。

〔同時代評〕中村地平「太宰治著『女の決闘』（『新潮』第三十七年第八号、昭和十五年八月一日）については、「駈込み訴へ」の項を参照のこと。

〔付記〕初出誌「古典風」には、「——こんな小説も、私は讀みたい。（作者）」というエピグラフが付され、本文末尾に「（完）」とある。なお、「編輯後記」には、「本号から創作欄を巻頭に置き、太宰氏の古典風をはじめ、堀田、大田氏らの三篇を収めた。創作欄のマンネリズム化の傾向の著しいときこれらの諸篇のもつ澆刺としたリズムの勁さにふれてほしい。」とある。

「古典風」草稿断片（仮題）

『太宰治全集第十巻』（筑摩書房、昭和五十二年二月二十五日）に、全文収載された。

『思ひ出』序（仮題）・思ひ出（太宰治短篇傑作集）・人文書院・昭和十五年六月一日発行・2、68、118、152、190、226頁
『太宰治全集第十卷』（筑摩書房、昭和三十一年七月二十日）に、「餘瀝近事片々」の序以外の部分が、『思ひ出』自序」と題して収載された。

山内祥史「太宰治『思ひ出』の書誌——『餘瀝近事片々』に関する全集逸文の紹介を兼ねて——」（『日本文芸研究』第十九卷第四号、昭和四十二年十二月五日）に、「餘瀝近事片々」の序の部分が紹介された。

『太宰治全集第十卷』（筑摩書房、昭和五十二年二月二十五日）に、全文収載された。

〔付記〕 末尾に「昭和十五年四月」とある。「思ひ出」「ダズ・ゲマイネ」「二十世紀旗手」「新樹の言葉」「富嶽百景」「餘瀝近事片々」の各中扉裏に、無題で収載された。

三月三十日・誌名未詳・昭和十五年六月発行・35～37頁・「隨筆」欄

『太宰治全集第十六巻もの思ふ葦（近代文庫23）』（創芸社、昭和二十七年七月一日）に、全文収載された。

〔付記〕 初出本末尾には「（完）」とある。満洲生活必需品会社の機関誌に発表された。瀬尾政記氏のご教示によれば、誌名は「物資と配給」か、とも考えられるが、現在未詳。発行日は、六月一日かと思われるが、これも現在未詳。

なお、「著者書入のある雑誌切抜」では、標題の「三月三十日」が抹消され、「祝建國」と改められている、という。

自信の無さ・東京朝日新聞・第一九四五七号・昭和十五年六月二日発行・6面・「槍騎兵」欄

『信天翁（太宰治文藻集）』（昭南書房、昭和十七年十一月十五日）に、全文収載された。

『太宰治随想集』（若草書房、昭和二十三年三月二十一日）に、全文収載された。

『太宰治全集第十六巻もの思ふ葦（近代文庫23）』（創芸社、昭和二十七年七月一日）に、全文収載された。

〔付記〕 振仮名付。なお、「本紙の文芸時評で、長與先生が……」というのは、長與善郎「現代新人の通性／自信のない基本作因——文芸時評(3)——」（『朝日新聞』昭和十五年五月三十日）を指すものと思われる。

盲人獨笑・新風・「七月・創刊號」・昭和十五年六月十三日發行・29～44頁

『東京八景』（実業之日本社、昭和十六年五月三日）に、全文収載された。

『女神』（白文社、昭和二十二年十月五日）に、全文収載された。

『誰も知らぬ』（ロッテ出版社、昭和二十三年八月十五日）に、全文収載された。

『東京八景』（実業之日本社、昭和二十三年八月二十日）に、全文収載された。

『太宰治全集第五巻駈込み訴へ』（八雲書店、昭和二十三年十一月三十日）に、全文収載された。

〔同時代評〕 葛原幽「葛原勾当をモデルの盲人獨笑をよみて」（『筆』第一輯、昭和十五年八、九月頃）があるはずながら、未見。

〔付記〕 初出誌の「盲人獨笑」には、「よる。まつこのまより月さやかにみゆると。ひとの申さるゝをきゝてよめる。／はなさきて。ちりにしあとの。このまより／すゝしくにほふ。つきのかけかな／まだ。ほかにも。あるなれど。まゝにしておけ。／—葛原勾當日記—」というエピソードが付されている。本文は、「はしかき」葛原勾當日記。天保八酉年。「あとかき」の三部から成っている。奥付には「第一号」とある。なお「編輯後記」には、「創作欄は、荒木巍、太宰治、寺崎浩、南川潤の力作に加ふるに、特に石川達三の連載長篇をもつてした。（略）なほ同人各自が身を入れ過ぎて、以上の他に創作二篇を組置きにしたほどの盛況である。」とある。

〔武技〕よりも「藝技」……十四日目の印象……相撲・六月号、第五巻第六号、夏場所後特輯其一・昭和十五年六月十五日發行・41頁・「夏場所全勝負表並日々印象記」欄

『信天翁（太宰治文藻集）』（昭南書房、昭和十七年十一月十五日）に、「國技館」と改題して全文収載された。

『太宰治隨想集』（若草書房、昭和二十三年三月二十一日）に、全文収載された。

『太宰治全集第十六巻もの思ふ輩（近代文庫23）』（創芸社、昭和二十七年七月一日）に、全文収載された。

〔付記〕「相撲」六月号の目次には、『武技』よりも『藝技』（十四日目）とある。

新連載中篇／乞食學生／第一回・若草・7月号、第十六卷第七号・昭和十五年七月一日発行・6～13頁

『東京八景』（実業之日本社、昭和十六年五月三日発行）に、全文収載された。

『道化の華』（実業之日本社、昭和二十二年二月二十日）に、全文収載された。

『東京八景』（実業之日本社、昭和二十三年八月二十日）に、全文収載された。

『太宰治全集第六卷東京八景』（八雲書店、昭和二十三年十二月三十日）に、全文収載された。

〔付記〕初出誌では、「大貧に、大正義、望むべからず。／＼フランソワ・ヴィヨン」というエピソードを付し、本文末尾に「（以下次號）」とある。吉田貫三郎・書。目次には「乞食學生（中篇）」とある。なお、「H」の「編輯後記」には、つぎのように記されている。「新連載中篇小説は、飄逸洒脱、太宰治氏が、その逞しい横顔をぬつと突き出した『乞食學生』。第一回から、諸君のど肝を抜いてしきりに次回の待たれるもの。挿畫はお馴染の吉田貫三郎氏が、わざ／＼作者太宰氏の寫眞を取り寄せての快筆。この新しい名コムビに惜しみなき喝采を送りたい。」

六月十九日・博浪沙・七月号、第五卷第七号・昭和十五年七月五日発行・12頁

『薄明』（新紀元社、昭和二十一年十一月二十日）に、「隨筆一束」の総題の下に全文収載された。

『太宰治隨想集』（若草書房、昭和二十三年三月二十一日）に、全文収載された。

『太宰治全集第十六卷もの思ふ葦（近代文庫23）』（創芸社、昭和二十七年七月一日）に、全文収載された。

連載中篇／乞食學生／第二回・若草・8月号、第十六卷第八号・昭和十五年八月一日発行・36～43頁

翻印状況については、「新連載中篇／乞食學生／第一回」の項を参照のこと。

〔付記〕初出本文末尾には、「（以下次號）」とある。吉田貫三郎著。目次には「乞食學生（中篇）」とある。

スポーツは下手・詩原・八月号、第一卷第六号・昭和十五年八月一日発行・60頁・「特輯隨筆 文壇とスポーツ」欄

『太宰治全集第十卷』（筑摩書房、昭和五十二年二月二十五日）に、全文収載された。

〔付記〕 表紙には「純文芸雑誌／誌原」^{特輯}「特文壇とスポーツ」とあり、口絵に「スポーツを語る作家」。なお、「編輯後記」には、つぎのように記されている。「盛夏の候、『特輯文壇とスポーツ』を読者御兄姉へお贈りする。清新気

鋭の人気作家を網羅し、それぞれの興味ある内容は、好読物として、自負した。尚巻頭には特輯に因み、執筆者の近影を口絵にした。もつと完璧を期したかったが、兎も角、編輯者の汗水たらしての努力を買ってほしい。」

貧婪禍・京都帝国大学新聞・第三百十七号・昭和十五年八月五日発行・2面・「銷夏特輯」の「海」「川」「山」のうちの「山」欄

『信天翁（太宰治文藻集）』（昭和書房、昭和十七年十一月十五日）に、全文収載された。

『太宰治随想集』（若草書房、昭和二十三年三月二十一日）に、全文収載された。

『太宰治全集第十六巻もの思ふ葦（近代文庫23）』（創芸社、昭和二十七年七月一日）に、全文収載された。

〔付記〕 振仮名付。本文末尾に「（七月十一日）」とある。

乞食學生／第三回・若草・9月号、第十六巻第九号・昭和十五年九月一日発行・38～45頁

翻印状況については、「新連載中篇／乞食學生／第一回」の項を参照のこと。

〔付記〕 初出本文末尾には、「（以下次號）」とある。吉田貫三郎著。目次には「乞食學生（中篇）」とある。

失敗園・東西・昭和十五年九月号

『東京八景』（実業之日本社、昭和十六年五月三日）に、「短篇集／その二」として全文収載された。

『東京八景』（実業之日本社、昭和二十三年八月二十日）に、「短篇集／その二」として全文収載された。

『太宰治全集第六巻東京八景』（八雲書店、昭和二十三年十二月三十日）に、「短篇集／その二」として全文収載された。

〔付記〕 未確認。号数、発行日、所載頁等は、不明である。初出を「東西」昭和十五年九月号と推定しうる理由については、拙稿『東京八景』の成立」を参照されたい。

文學者として近衛内閣に要望す・新潮・九月号、第三十七年第九号、通卷四百三十二号・昭和十五年九月一日発行・38頁・「文學者として近衛内閣に要望す（ハガキ回答）」欄

平野謙「文芸時評―自己革新について―」（「都新聞」昭和十五年十月三十一日）に、全文紹介された。

渡部芳紀「相馬正一著『若き日の太宰治』（国語と国文学）第四十五卷第十二号、昭和四十三年十二月一日）に、全文紹介された。

『太宰治全集第十卷』（筑摩書房、昭和五十二年二月二十五日）に、全文収載された。

〔同時代評〕 平野謙「文芸時評―自己革新について―」（「都新聞」昭和十五年十月三十一日）については、「きりぎりす」の項を参照のこと。

〔女の決闘〕その他・月刊文章・九月号、第六卷第九号・昭和十五年九月一日発行・50～52頁・「自作を語る」欄

『信天翁（太宰治文藻集）』（昭南書房、昭和十七年十一月十五日）に、「自作を語る」と改題して全文収載された。

『太宰治随想集』（若草書房、昭和二十三年三月二十一日）に、全文収載された。

『太宰治全集第十六巻もの思ふ葦（近代文庫23）』（創芸社、昭和二十七年七月一日）に、全文収載された。

〔付記〕 初出本文末尾には「以上。」とある。

乞食學生／第四回・若草・十月号、第十六卷第十号「十五周年記念特輯」・昭和十五年十月一日発行・20～28頁

翻印状況については、「新連載中篇／乞食學生／第一回」の項を参照のこと。

〔付記〕 初出本文末尾には「（以下次號）」とある。吉田貫三郎著。目次には「十五周年特輯」「乞食學生（中篇）」とある。

一燈・文芸世紀・十一月号、第二卷第十一号・昭和十五年十月十二日発行・48～51頁

『東京八景』（実業之日本社、昭和十六年五月三日）に、「短篇集／その一」として全文収載された。

『東京八景』（実業之日本社、昭和二十三年八月二十日）に、「短篇集／その一」として全文収載された。

『太宰治全集第六卷東京八景』（八雲書店、昭和二十三年十二月三十日）に、「短篇集／その一」として全文収載された。

浪漫萬歳・文筆・五週年記念隨筆特輯号・昭和十五年十月三十日発行・23～24頁

『太宰治隨想集』（若草書房、昭和二十三年三月二十一日）に、「砂子屋」と改題して全文収載された。

『太宰治全集第十六巻もの思ふ葦（近代文庫23）』（創芸社、昭和二十七年七月一日）に、全文収載された。

〔付記〕 初出本文末尾に「〔晩年、女生徒の著者〕」とある。表紙には「昭和拾五年拾月／五週年記念特輯」とある。

〔佐伯生〕の署名のある「編輯後記」には、つぎのように記されている。「書房開業五週年になるので、記念隨筆号を刊行することにした。その意味で書房から著書を出版された方々から原稿を戴きました。御覧の通り多数戴きましたことは、書房への著者各位の御厚情の賜物と感謝に堪えません。こゝに有り難く御礼申し上げます。（これだけの隨筆特輯は他に類のないことと編輯掛として誇りに思ひます）」

パウロの混亂・現代文學・十一月号、第三卷第九号・昭和十五年十月三十一日発行・62～64頁

『信天翁（太宰治文藻集）』（昭和書房、昭和十七年十一月十五日）に、全文収載された。

『太宰治隨想集』（若草書房、昭和二十三年三月二十一日）に、全文収載された。

『太宰治全集第十六巻もの思ふ葦（近代文庫23）』（創芸社、昭和二十七年七月一日）に、全文収載された。

〔同時代評〕 岩上順一「太宰治の一面」（『三田文学』第十六卷第二号、昭和十六年二月一日）には、つぎのように記されている。

彼は今日すでに立派な文学的地位を築き上げた。しかし私は、彼が「ポウロの混亂」といふ隨筆のなかで、ポウロの性格を一、彼の風采上らず、その言語野卑なり。二、横暴なり、破壊的なり。三、自家広告が上手で、自分のことばかり言つてゐる。四、臆病なり、弱い男なり。云々と定義してゐるのを憶ひ出さずにはゐられない。彼は、この定義を、ことさら自分自身に向つて言つたのではないか、といふ様な氣がする。

〔付記〕 初出本文末尾に「(十月一日)」とある。

連載中篇／乞食學生／第五回・若草・11月号、第十六卷第十一号、「奉贊・皇紀二千六百年」・昭和十五年十一月一日発行・44～51頁

翻印状況については、「新連載中篇／乞食學生／第一回」の項を参照のこと。

〔同時代評〕 「新連載中篇／乞食學生／第一回」の項を参照のこと。

〔付記〕 初出本文末尾に「(次號完結)」とある。吉田貫三郎著。目次には「乞食學生(中篇)」とある。

きりぎりす・新潮・十一月号、第三十七年第十一号、通巻四百三十四号・昭和十五年十一月一日発行・182～195頁・

〔創作〕欄

『東京八景』(実業之日本社、昭和十六年五月三日)に、全文収載された。

『日本小説代表作全集9 昭和十五年後半期』(小山書店、昭和十六年六月一日)に、全文収載された。

『女性』(博文館、昭和十七年六月三十日)に、全文収載された。

『玩具(あづみ文庫)』(あづみ書房、昭和二十一年八月十日)に、全文収載された。

『二十世紀旗手』(浮城書房、昭和二十三年五月一日)に、全文収載された。

『女生徒(青春の書12)』(鎌倉文庫、昭和二十三年八月十五日)に、全文収載された。

『東京八景』(実業之日本社、昭和二十三年八月二十日)に、全文収載された。

『太宰治全集第六卷東京八景』（八雲書店、昭和二十三年十二月三十日）に、全文収載された。

〔同時代評〕 平野謙「文芸時評―自己革新について―」（『都新聞』昭和十五年十月三十一日）には、つぎのように記されている。

作家精神の在りやうという点で、私は太宰治の『きりぎりす』（新潮）を興味ふかく読んだ。ここにみられる生粋の反俗精神は、現在私どもでもつたへきく日本画壇のインフレ景氣に対する諷刺といふやうな素材的意味を超えてゐる。私は二三ヶ月前の『新潮』のアンケートに氏がただ「唯物史觀の徹底的検討」といふ意味のことを答へてゐたのを思ひだし、この作者の健在を祝福した。氏にたえずつきまといつてゐた一種のシャルラニスムも洗はれ、哀婉清楚な行文の裡に作者の氣魄がしみてゐた。今日の佳作であらう。

嵯峨伝「創作月評」（『新潮』第三十七年第十二号、昭和十五年十二月一日）には、つぎのように記されている。

太宰治の「きりぎりす」は例の形式で、ひとつの抗議をもち出してゐるのは、これまた近頃のこの作者の傾向の型をみせてゐるといへる。清貧から一転して売れっ子になつた新進画家の妻が、はじめ、清貧の故に純粹だつたその画家と、家の反対をおしきつて結婚するのだが、画家が有名になつて来ると、妻としての自分の仕事がなくなつて所謂「奥様」になつてしまふ。今まで寄りつかなくなつた家人たちが、ちやほやするといふやうな変りかたになるが、画家といへば、毎朝便所で「おいとこさうだよ、……」を歌つてゐる。皮肉には違ひないが、皮肉にまけてゐないユモラスな筆致は、この作者の腹中にでもひそむ、何か逞ましいものを思はせる。しかしこの小説はあまり後味のよいものではなかつた。

高見順「反俗と通俗―文芸時評―」（『文芸春秋』第十八卷第十五号、昭和十五年十二月一日）があるが、これは長文にわたるため省略する。

無署名「新潮」（『三田文学』第十五卷第十二号、「今月の雑誌」欄、昭和十五年十二月一日）には、つぎのよう

に記されている。

創作は、島木健作の「運命の人」連載第五回の外、「妻の叔父」新田潤、「湖畔にて」北原武夫、「きりぎりす」太宰治、「彌勒」稲垣足穂。それぞれの持味が出て居り、各々自分の手法に従つてゐる。

三上秀吉「文芸時評」(「文学者」第二巻第十二号、昭和十五年十二月一日)があるはずだが、いま資料が見当たらない。

無署名「文芸春秋」(「三田文学」第十六巻第一号、「今月の雑誌」欄、昭和十六年一月一日)には、つぎのように記されている。

高見順が「反俗と通俗」(「文芸時評」)を論じてゐる。例の如く、遠慮しいしいではあるが、太宰治の「きりぎりす」の内容を、反俗ではなく、通俗だと論断してゐる。これはちよつと面白い。これは小説の時評に限定せず、女の世界にまではいつてゐるが、面白い解釈であり、高見の考へには、小生も賛成する。たゞ「きりぎりす」の精神を批評するにはジイドの「女の学校」を参考にして欲しかった。ジイドは、そのことを手紙文で書いてゐる。太宰の小説は、ジイドの「女の学校」の日本訳といへばいへるものである。しかも、俗悪な日本訳である。

岩上順一「太宰治の一面」(「三田文学」第十六巻第二号、昭和十六年二月一日)には、つぎのように記されている。

この純粹への郷愁、人間的眞実へのひたむきな追及が、そのまま「きりぎりす」の、弱いがしかし眞剣な、思ひつめて純粹な反俗精神となつて現はれてゐることについては、も早や説明するまでもないであらう。／「きりぎりす」は、芸術にたいする純粹な没我的な愛情と、名誉や地位や財産に対する俗人的な執着との間の葛藤を描いたものである。はじめは「展覧会にも大家の名前にも、てんで無関心で、勝手な画ばかり描いてゐる」若い画家の、芸術に対する純粹な無我な献身に惹かれ、その故にその画家に嫁した女主人公は、やがて、この画家が世間的に有名

となり、地位と財産を得るに従つて、次第に芸術への純粹な献身性を喪失し、日に日に卑劣な俗人になり下つて行く有様に、その心の純粹さを裏切られた憤りを、「脊骨のなかで、小さいきりぎりすが鳴いてゐるやう」に、かばそくも淋しく、しまつて行かうと言ふのである。この女主人公が「なんでそんなに、お金にこだわる事があるのでせう。いい画さへ描いて居れば、暮しのほうは、自然に、どうにかなつて行くものと私には思はれます。いい仕事をなさつて、さうして、誰にも知られず、貧乏で、つつましく暮して行く事ほど楽しいものはありません。私は、お金も何も欲しくありません。心の中で、遠い大きいプライドをもつて、こつそり生きてゐたいと思ひます。」とべてゐる言葉のなかには、この作家の、孤独な、良心の妥協を欲しない深い反俗精神が流れてゐる。／＼しかしその流れは、「八十八夜」や「善藏を思ふ」の中にある、あの猛々しい焦々するほどの酷烈さを失つた、絶え絶えな、ほそやかなものとなつて来たのは何故であらうか。おそらくそれは作家自身の生活が、いつしかここに描かれてゐる画家の生活のやうに、多少とも世俗に適應して来ざるを得なくなつたことの証拠であるかも知れぬ。作家は自らの生活を含めて、俗人世界の抗ひがたい腐蝕力の前に、ただひそやかな嗟嘆の声を漏してゐるのかも知れないのだ。

短篇ラヂオ小説／ある画家の母・AK放送台本・昭和十五年十一月五日放送・1～13頁

『東京八景』（実業之日本社、昭和十六年五月三日）に、「短篇集／その三リイズ」として全文収載された。

『東京八景』（実業之日本社、昭和二十三年八月二十日）に、「短篇集／その三リイズ」として全文収載された。

『太宰治全集第六卷東京八景』（八雲書店、昭和二十三年十二月三十日）に、「短篇集／その三リイズ」として全文収載された。

〔付記〕 初出本文末尾には「（終り）」とある。昭和十五年十一月五日夜九時半からJOAKで放送された「短篇ラヂオ小説」の台本である。語り手Ⅱ北澤彪、杉野君Ⅱ三木利夫、母親Ⅱ伊藤智子、少女Ⅱ笠原和子の役割で放送された。

獨語いつ時・帝國大学新聞・第八百三十三号・昭和十五年十一月二十五日発行・7面

『信天翁（太宰治文藻集）』（昭南書房、昭和十七年十一月十五日）に、「かすかな聲」と改題して全文収載された。

『太宰治全集第十六巻もの思ふ葦（近代文庫23）』（創芸社、昭和二十七年七月一日）に、全文収載された。

〔付記〕 振仮名付。

連載中篇／乞食學生／第六回・若草・12月号、第十六巻第十二号・昭和十五年十二月一日発行・48～57頁

翻印状況については、「新連載中篇／乞食學生／第一回」の項を参照のこと。

〔同時代評〕 「新連載中篇／乞食學生／第一回」の項を参照のこと。

〔付記〕 初出本文末尾には「（完）」とある。吉田貫三郎著。目次には「乞食學生（中篇）」とある。

連載ろまん燈籠／その一・婦人画報・十二月号、第四百四十二号・昭和十五年十二月一日発行・194～200頁・「学芸・小説」欄

『千代女』（筑摩書房、昭和十六年八月二十五日）に、全文収載された。

『ろまん燈籠』（用力社、昭和二十二年七月十日）に、全文収載された。

『ろまん燈籠』（改造社、昭和二十三年五月二十日）に、全文収載された。

『太宰治全集第六巻東京八景』（八雲書店、昭和二十三年十二月三十日）に、全文収載された。

〔同時代評〕 無署名『千代女』（小説集）太宰治著（三田文学）第十六巻第十一号、昭和十六年十一月一日）には、つぎのように記されている。

こゝに収められてゐる「みみづく通信」以下「ろまん燈籠」までの七篇はすべてこゝ一二年の近作を集めたものでそれぞれ評判を得たものであるが、一々作品に触れて行くやうな読み方を僕はしなかつたし、読者にもお奨めはしない。短篇集「千代女」として娯まれない。——僕はこゝで太宰治を未知の読者に太宰の特徴を紹介しやうと思

つたのだがそれは止めにしてをこう。この作品集でもつとも感じたのは、外でもない小説の娛しさ、虚構の美しさと云ふものであつた。僕は、読者に、ただこれは娛しい本ですよとお奨めすれば良いと思ひ返したのである。こゝには深刻なる事件と云ふものは内外ともない。あるのは、嘘、すなはち物語りと云ふものばかりである。ここで僕等は「話し」と云ふものが如何に僕等を豊富にし、感情を美しくしてくれるかを知るのである。

小坂松彦「文芸時評—二三の新進作家とその方法—」（『赤門文学』創刊号、昭和十六年十二月一日）には、つぎのように記されている。

今後の一作一作における氏の發展を注目することは確に興味ある事と思ふ。最近の短篇集「千代女」などの諸篇を初期の作品と比べて読んでみると、その間に氏の辿つた發展に驚くのである。「愛と美について」と「ろまん燈籠」などを比較してみると、そこにも色々の暗示が感ぜられる。

〔付記〕 目次には「連載ろまん燈籠（第一回）」とある。繪・伊勢正義。「〔K〕」の「編輯後記」には、「本号より太宰治氏の『ろまん燈籠』を連載する。」とある。昭和十六年六月号まで、六回連載（二月号休載）。

田中君に就いて・オリムポスの果実・高山書院・昭和十五年十二月十五日發行・1~3頁

『如是我聞』（新潮社、昭和二十三年十一月十日）に、『オリムポスの果実』序—田中英光のこと—として全文収載された。

『太宰治全集第十六巻もの思ふ葦（近代文庫23）』（創芸社、昭和二十七年七月一日）に、全文収載された。

〔付記〕 田中英光著『オリムポスの果実』の序として執筆されたもの。初出本文末尾に「以上」とある。

〔追記〕 本稿は、左記のように連載してきた拙稿の、続篇に当るものである。

「太宰治著述一覽稿（I）—自大正十二年至昭和七年—」（『神戸女学院大学論集』第十九巻第三号、昭和四十八

年三月十五日)

「太宰治著述一覽稿(Ⅱ)——自昭和八年至昭和十年——」(神戸女学院大学論集「第二十卷第一号、昭和四十八年八月二十五日」)

「太宰治著述一覽稿(Ⅲ)——自昭和十一年至昭和十三年——」(神戸女学院大学論集「第二十卷第二号、昭和四十八年十二月十八日」)

「太宰治著述一覽稿(Ⅳ)——昭和十四年——」(神戸女学院大学論集「第二十卷第三号、昭和四十九年三月二十日」)
暫時休載したのは、改訂版『太宰治全集』全十二卷(筑摩書房、昭和五十年六月二十日)昭和五十二年十一月三十日)発行の企画を知ったためである。改訂版全集に紹介されるすべての資料をも踏まえて続稿を書き継ぎたい、と考えたからだ、その全集も幸いに多くの成果を挙げて完結した。ここに再び続稿を掲載させていただく由縁である。なお、本稿の「凡例」は、(Ⅰ)の冒頭に記したので省略した。また、休載の間に、(Ⅰ)と(Ⅳ)に発表した諸資料にも、多くの補訂すべき点を発見したが、これは更めて一括発表するようにしたい。

この稿を草するに際し、つぎの諸氏、諸図書館、諸社の助力を得た。記して深く謝意を表する。青山毅氏、池田雅雄氏、伊崎治三郎氏、浦西和彦氏、近藤勝氏、瀬尾政記氏、関井光男氏、津島美知子氏、西村直道氏、菰沢謙氏、八木政彦氏、山田正一氏、渡部芳紀氏、朝日新聞東京本社、大阪府立中之島図書館、大阪府立夕陽丘図書館、京都大学附属図書館、慶応義塾図書館、神戸女学院大学図書館、国立国会図書館、昭和女子大学近代文庫、中日新聞東京本社、東京学芸大学図書館、東京大学総合図書館、東京都立大学附属図書館、日本近代文学館、阪急学園池田文庫、広島大学附属図書館、舟橋聖一記念文庫、早稲田大学図書館、審美社、筑摩書房、宝文館出版株式会社。